

## ✈️ 海外生活 だより

パリ事務所

# 広がる連帯の輪、 「保留コーヒー」

(一財)自治体国際化協会パリ事務所所長補佐  
西山 礼 (群馬県太田市派遣)

### 今流行りの……

最近フランスでちょっと流行っていること。それはカフェに行って、コーヒーを「保留」にすることです。私もこの流行に乗り遅れまいと、先日カフェに友達と行った際に、コーヒーを保留にしてきました。お店の人は、アジア人の私が「コーヒーを2つ。1つは“保留”にしてください」と言ったのを聞いてとても驚いていましたが、それからすぐに満面の笑顔になり、私の注文を受けてくれました。

今回は、今フランス全国に広がっているユニークなボランティア活動、「保留コーヒー」についてご紹介したいと思います。

### 保留コーヒーとは

初めて聞いたときはなんのことかさっぱりわからなかった、「保留コーヒー (Café suspendu)」。皆様にとっても聞きなれない響きで、ぴんとくる人は少ないかと思います。これは、「必要とする誰か」のために、コーヒーの料金を先払いするシステムのことだそうです。皆様にコンセプトをわかっただけのよう、保留コーヒーを説明する有名なエピソードを紹介したいと思います。

『ある日私と友人は、小さなカフェに入り、それぞれコーヒーを注文した。

テーブルにつこうとすると、2人の客がカウンターに向かい「コーヒー5つ。3つは“保留”で」と言ってコーヒー5杯分の支払いを済ませていた。

「コーヒーの保留って何?」「見ていればわかるよ」暖かい日差しの中、私はカフェの前にある広場の眺めを楽しみながらも、コーヒーの“保留”について考えていた。

すると突然、みすばらしい服を着た男がカフェのドアを開けて、店員に丁寧な態度でこう尋ねた。

「すみませんが、“保留”のコーヒーはありますか?」

「コーヒーの“保留”、それはとてもシンプルな仕組みだった。

人々は、温かい飲み物を買う余裕のない誰かのために先払いをしていたのだ。』

(Facebookページ「Café suspendu」より抜粋)

保留コーヒーは、経済的に苦しい立場にある人たち、路上生活者、失業者、低所得者、高齢者、学生などを対象としており、単純にコーヒーだけを提供するのではなく、コーヒーとともに過ごすカフェでのひととき、生活の苦勞を和らげるひとときも提供する、という目的があります。

この活動の起源は古く、1900年代初頭のイタリア・ナポリに端を発しています。もともとあまり裕福でなく、コーヒー代を払うのもやっと、という人々が少なからずいたこの地域で、人々への思いやりの気持ちから生まれた行為だったそうです。細々と続いてきたナポリの保留コーヒーでしたが、経済不振の影響もあってか、ここ数年でじわじわとヨーロッパ、そして世界に広がっていったようです。この活動はついにフランスへも波及し、2013年の初め頃から保留コーヒーがメデイ

アを賑わせ始めるようになりました。

どれほど国内に浸透しているかについて、正確な数の把握は困難なのですが、現在フランスでは、少なくとも約400軒のカフェが保留コーヒーを実施

していることが、保留コーヒーの宣伝用広告、Facebookで使用呼びかけCoffee Fundersというカフェ検索サイトへの登録によりわかっています。また、フランスの保留コーヒーを代表するFacebookページには現在約8,100人もので応援があります。地域ごとでも保留コーヒーについて情報が得られるようなページが開設されていて、保留コーヒーがフランス国民のコンセンサスを得つつあることがわかります。

もちろん、貧しい人のために何かする、という行為はこれだけに限ったことではなく、フランスでも生活困窮者などに対する支援は多様なかたちで行われています。しかし、自分の飲むついでにもう一杯頼む、という手軽さ、また、用途のわからないままにお金を渡すのではなく、本当に必要としている人に、コーヒーとカフェでのひとときを提供するという健全さ・明確さが、このボランティア活動の波及を助長しているようです。

保留コーヒーの宣伝用広告、Facebookで使用呼びかけ

カアン市の有志が立ち上げたページは、わずか2日で1400もの応援を得ている

## 小麦なしのバゲット??

毎朝、メトロの入り口で配られている無料新聞をもらっているのですが、ある日、変なタイトルが表紙を飾っていました。そのタイトルは「la baguette sans blé」というもので、直訳すると「小麦なし (sans blé) のバゲット (baguette)」。

びっくりして、まさか日本食ブームの影響で米粉バゲットでも作ったのかしら? と思い、記事を読んできたところ、まったくの見当違いで、思わず電車の中で苦笑してしまいました。blé (小麦) という単語にはスラングで「お金」という意味があったことを、すっかり忘れていたからです。つまり、「la baguette sans blé」は「お金のかからないバゲット」という意味合いで、「保留バゲット」のことを意味していたのです。

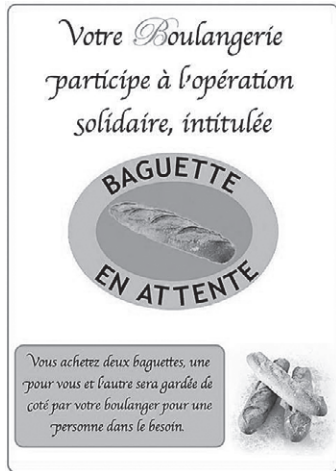
無料新聞「20minutes」の一面

ナポリでのコーヒーを起源としていた「保留…」の活動は、現在世界中で、その国の文化に合うようにかたちを変えて展開されています。そこで、フランスで生まれたのは、フランス人の食生活に欠かせない保留バゲットだったのです。原則は同じく、誰かのためのバゲットを先払いする、とい

うものです。

発案者であり、インターネットサイト「保留バゲット (baguette en attente)」を開設したジャン=マニュエル・プリム氏は、保留コーヒーのコンセプトに感銘を受けて、フランスの食生活のシンボルであるバゲットにアレンジすることを思いついたそうです。

2013年5月、プリム氏の呼びかけによって、彼の地元、フランス中部のピュイ・ド・ドーム県にある2軒のパン屋さんで、この試みが開始されました。これは瞬く間に人々に知れ渡り、2014年2月21



HP「baguette en attente」からダウンロードできる実施店用の広告

日現在、フランス国内の126店舗のパン

屋さんが保留バゲットを実施しています。プリム氏へのインタビューによれば、現在実施している店舗での平均は10本で、なかには一日20本が「保留」になる店舗もあるとのこと。

保留バゲットのルポルタージュの中で、保留バゲットの恩恵を受けた高齢の年金受給者が、「少ない年金で、月末はいつも家計のやりくりに困ってしまうんだ。毎日食べるバゲットがこうして手に入るのは嬉しいし、皆の思いやりにとっても感謝しているよ」と微笑んでいたのが印象的でした。

## 行政からのサポート

そしてフランス中に広がったこの連帯の精神は、市民だけでなく、行政をも巻き込む大きな活動になりつつあります。

例えば、フランス北部、オワーズ県の県庁所在地であるボーヴェ市では、12月10日を「保留コーヒーの日」と定め、10数軒のカフェが、ボーヴェ市より提供された保留コーヒー実施店の看板を掲げました。これは2011年12月10日、発祥地のナポリ市にて、この日が保留コーヒーの日と定められたのに由来しています。連帯の行動をフランス中

で定着させ、この日を国中で認知されるような記念日にすることを願って、企画されたそうです。

国もこの活動に注目しており、障がい者・障害防止対策担当省大臣のマリー=アルレット・カルロティ氏は、国民が自発的にこのような行動を起こしたことはとても素晴らしく、国もこの活動の拡大に協力したい、と公的に支援を表明しました。

## 世界の「保留」いろいろ

先にもご説明したとおり、この連帯の精神はさまざまな姿で、世界中に浸透しつつあります。フランスでもバゲットのほかに「保留ケバブ」や「保留ピザ」、お隣のベルギーでは「保留フライドポテト」、発祥地と文化的に差異の大きい台湾や中国でも、なんと「保留麺」が提供されているそうです。

日本はどうだろう？と思って調べてみたところ、まだ数は少ないながらも、保留コーヒーの取り組みが始まっていました。

## 終わりに

国民が生活困窮者の存在を認識することなしには、この活動は広がり得ないと考えます。その点で、日本はフランスをはじめ、「保留…」の活動が浸透しつつある国々と比べると路上生活者の数は格段に少なく、経済的に困っている人を日常で目にする機会は、これらの国よりも少ないかもしれません。それでも、その数はゼロではありません。この活動を少しでも多くの日本の方に知ってもらい、このような人々を助けるための何かのきっかけになれば、と思い今回の題材に選びました。また、ボランティア活動という響きには、何か大変なことをしなくてはいけないような気がして、身構えてしまう人もいるかもしれません。しかし、この「保留…」の活動は、そんな心配をせずに、日常の延長で簡単にできる行為です。

私の今度の目標はバゲットの保留。家の近くに実施しているパン屋さんがあるので、近いうちに行つてこようと思っています。